なかつたら、疾くに放逐して了つたでありましたらう。

斯くてヨハネは、祈禱と斷食と流涕とを日々の課業として、三年の月日を過したのでありますが、天主樣の啓示により愈々最期が近いたと知るや、家僕に取繼を賴んで、『奧樣に是非ともお話したいことがありますから、其處まで御出て戴くことは出來ますまいか』と願ひ出ました。夫人は平生病人の見舞なぞ怠る方ではなかつたが、此病人だけは、何うしたものか、厭で〳〵近寄りたくない。强ひて我と我心を制して室の入口に近きまするとと、聖人は丁寧に會釋して、自分のやうな識りもせぬ哀れな乞食を親切に世話して下さつた御厚意を謝し、此の御厚意を酬い給はんことを天主樣に一心と祈つて止まない旨を述べた上で、野邊送りのことまでも吳々と賴み、夫人が快く承知して吳れた

ので、御禮の印しまでにと、立派に綴つた聖福音書を奉呈げました。

『此んな風態をして居ながら、何うして斯う云ふ立派な書を有てるんだらうか』、と夫人はけゞんな顏して見入る眼前に、ふいと例の愛子、その曾て愛子に與へた聖福音書の姿が電光の如く立現はれて、涙は忽ち泉と湧き、しやくり泣きに泣き伏しました。父も泣音を聞きつけて馳せ來り、よく〳〵其書を調べて見て、『是こそ我子のに相違ない。何うして是れが御手に入りました、我子は如何なつたのでせう』と、我子とは知らずに、周章しく聖人に尋ねました。もう虫の息の聖人は、大きな嘆息をつき、涙ながらに『是れは貴方等が十年前に私に下さつたのです、貴方等が今まで泣きの涙で尋ねて居なさる子は慥にこの私です』と曰へば、兩親は夢かとばかりに驚いて、ひしと之に抱き付きま

すると、聖人は兩の手を擧げ、靜に天を仰ぎつゝ、眠るが如く息絶ゑて、十年の久しき間、數々の犧牲を献げ、苦行を勤め、瀧なす涙を流して、玉の如く磨き上げたその靈魂を、天主樣の御手に返上されました。（紀元四百五十年）

あゝ此の聖人こそ、靈魂の眞價を辨へて、之が爲に骨を惜まず、力を愛まず働いた人である。一生涯、その清き行爲を以て天主樣を光榮した人である。今や天に昇りて窮りなき福樂に溢れつゝ、世間に克ち、骨肉の愛に打克つ恩寵を賜はつたのを、厚く天主樣に感謝して居なさるでせう。斯うして死ぬ人こそ、誰の目から見ても幸福な人ではありませんか。

二、イエズス樣は靈魂を救はんが爲に、如何な辛い目を見給うたか。

天主樣が我々を救はんとて、殆ど御力の限りを盡して下さつたことを考へたならば、靈魂の眞價はいよ〳〵明白になつて來るでありませう。之を御肖に擬へて御造り下さつたのも、つまり何時眺めても御自分を視るやうな心持がして、何うしても愛せずに居られなくなるが爲でありました。隨つて靈魂を呼ぶに、『我子』だの、『我妹』だの、『我が愛するもの』だの、果ては『我配』『我が唯一のもの』、『我鴿』だのと濃な愛情の籠つた名を以てして、その御心に燃ゑ立つて居る愛の火焔の如何に熾なるかを表はし給うた。然し口先で何ぼ言つたとて、行爲の上に證據立てない限りは、眞の愛ではないから、態々光眩き高座を降りて、我々に等しき人性を受け、その人性の附帶物たる有ゆる災難、

痛苦をも御身に引受け、我々に代つて御父の正義に相當の償を拂はうとして下さいました。

先づ御托身の玄義と云ふのが、己を無きものとして、高い〳〵天の頂より、低い〳〵下界に降り給うたことではありませんか。その貧困の驚くべきを見なさい、牛馬見たやうに厩の中に生れ、藁を蓐に臥かされ給うた位、その幼い御兩眼には早や露の玉を浮べて、連りにお泣き遊ばしたのも、つまり我々の罪を悲んでゞありましたらう。八日目には割禮を受けて鮮血を流し、間もなく敵に迫害められ遠い埃及三界まで落ち行きなさつたのを見なさい。ナザレトに歸つては、如何ほど謙遜して兩親に從ひなさいましたか。ゲツセマニの園では、悲んで嘆いて、血の汗までも滴らして祈り、やがて敵の手に落ちて、高手

小手に縛り上げられ、踏まれるやら、蹴られるやら、叩かれるやら！石の柱に縛り付けられては、雨と降り來る笞の下に、玉體は皮飛び、肉ちぎれ、血汐迸りて、刑吏までが眞赤く血塗れとなりました。御頭は恐ろしい茨の冠に貫かれ、肩には重い十字架を打掛けられ、膝はわな〳〵、足はよろ〳〵、倒れては起き起きては倒れして、カルワリオの坂路を辿りなさる御痛ましさ！終には十字架に釘けられても、小言一つ曰ふのではなし、唯だ愛の涙を溢らして、靜に人類の罪を泣き給うた。あゝ其の聖い御血に混つて流れた愛の涙の難有いことよ！是れこそ、『愛』と呼ばれ給ふ天主樣に適はしい愛ではありませんか。この愛を熟々と考へたならば、何人か靈魂の眞價のほどを悟らずに居られませう、この靈魂の爲とあらば、骨を愛まず、力を惜まず、何處〳〵

までも立働く氣にならずに居られませうか。

あゝ靈魂！靈魂は天主樣の御眼には、斯くまで貴く、美しく輝くのですのに、我々は何うして之を忽諸にして、犬猫よりも酷冷く取扱つて居るのでせうか。もし靈魂にして己れ自らの美點を識り、その見事な性質を認めることが出來るとするならば、さう云ふ立派な身の上を、見す〳〵罪惡の泥水の中へ引ぱり込まれる時には、如何な氣持がするでせうか。取分け不潔な快樂の汚瀆の中へでも轉がし込まれるよと見た時なぞは、何とも言ふべからざる不快な感がするに違ひない。天主樣の直ぐ次にでも置かれる程の立派な靈魂も、然うなつたら非常に我と我身を恐ろしく思ふでありませう。あゝ天主樣、我々は何うして斯んなに美しい靈魂を、それほどまで疎略に取扱ふので厶いませう。

試に罪に汚れた靈魂の恐ろしい、厭な、醜しい姿を思つて見なさい、聖寵に活て居る間こそ實に神樣とも見違へられる位であるが、一たび罪を犯すや、前の姿は何處へやら、全く見る影もない態に成り果てゝ了ひ、丁度屍の腐れ爛れて、見るに見られぬ姿に成り變つたのも同樣で、それを見ては何人にしても、『倒れたり、倒れたり大なるバビロネは、既に惡魔の住所となれり』（默示一八ノ二）、と叫ばずには居られますまい。

あゝ聖寵に飾られて居る靈魂の美さ！之を心から悟り得るものは唯だ天主樣お獨りで、天主樣が世に宗敎を立て給うたのも、たゞ此の靈魂を幸福ならしめる爲でありました。七の祕蹟を定め給うたのも、ただ靈魂を强めて、罪に傷つけられた時は早速之を痊して、いよ〳〵勇

しく戰はしめる爲でありました。然し此祕蹟を定めるに付けては、如何な輕悔、凌辱を覺悟せねばならぬのでありましたらうか。其掟は破られ、其祕蹟は汚され、瀆聖は瀆聖に重ねられる、と云ふことは、火を見るよりも明瞭であつたけれども、それしきの事は覺悟の前で、これを御定めて下さいました。靈魂の爲ならば何でも爲てやる、今一度死ぬ必要があれば、喜んで死んでもやらうと云ふ位に、靈魂が少でも難儀に及んで居る、憂苦に沈んで居ると見給ふや、飛び立つて援助に來て下さると云ふ位に、御自分を愛したいと思つて居る靈魂が見付かつたら、どんな世話でも燒いて下さると云ふ位に、熱い〳〵愛を傾けて愛して下さるのであります。

一たび靈魂の何たることを知り、天主樣が如何に之を愛し給ふか、

之が爲には後世に如何なる褒賞を備へて居なさるかを、よく〳〵悟りましたならば、何人しも、聖人等の樣な心掛にならずには居られぬ筈である。たとへ財寶の眩しい光が眼前に閃いても、快樂の美しい手が側から引張りに來ても、暗い恐ろしい死の陰影が後に迫まつて來ても、決してこの大切な靈魂を惡魔に賣飛ばすやうな氣にはなれぬ筈である。殉教者等を見なさい、唯だ靈魂を滅ぼしてはならぬと云ふもので、堪へ忍ばれた其の恐ろしい責苦を眺めて見なさい。天主樣の爲と思つては、餘りの嬉さに雀躍りしつゝ刑吏に身を付し、刑臺に馳せ登られた勇氣の程をつぐ〳〵と打眺めて見なさい。

その中でも、何時まで眺めても見厭かぬ思のされるのは、ヂオクレチアン皇帝の時に殉教された、

聖女クリスチナの美しい御手本

でありませう。聖女はイタリアのトスカヌ州の生で、今年取つて僅に十歳の小娘。父はトスカヌの知事でありましたが、非常な偶像教の凝固者で、自ら我娘を無理無慘に責め呵んだのでありました。事の發端は、クリスチナが父の禮拜んで居た金銀の偶像を取出して之を打壞し、地金を貧困な信者に施して了つたからで、父はそれを見るや怒るまいことか、早速娘を捕へて刑吏に付し、手酷く鞭たして、血塗になつた少女の體を、小さい金熊手で一杯かき拷らせ、其處にも此處にも白い骨が見はれるまでも責めさせた。クリスチナの痛苦は如何ばかりでありましたでせう。然し少女はびくともしませぬ。小さな、可愛らしい手をさし伸ばして切れ落ちた肉片をかき集め、『御父さん、これ御喫り』

と父の眼前に差出しました。

同情もなければ、涙も有たない父は、飽まで心を鬼にして、少女を鐵の鎖で縛り上げ、『まだ〳〵酷い目に遭はしてやるぞ』と苦々しい毒言を浴せかけ、暗い、恐ろしい監獄に打込みました。

果せるかな二三日もたつと、クリスチナを監獄より引出し、地面から少し高く一臺の車輪を据ゑ付けて、之に縛り、油を八方より濺ぎかけて、下から火を付け、車輪をクル〳〵と廻はして、少女の體に火と眩目と二樣の苦を受けさゝうと謀んだのでありましたが、案に相違して、火は此の清淨無垢の體を遠慮して何の苦痛も與へませぬ。却て周圍を取卷いて、見物して居つた偶像教者の方へ火焔が飛び行きまして、千人以上も燒き殺しました。

父は憎い我娘を思の儘に苦め得ないのを見て、殘念で〳〵堪りませぬが、差當り何とも手の出し様がないので、一先づ監獄へ引戻させた。然るに監獄には天使が天降つて、クリスチナを慰め、その傷を拭うてでも取つたかの様に悉く癒して新に力を付けて下さいました。狼にも劣つた父は、此の奇蹟を耳にして、いよ〳〵堪り兼ね、終に最後の手段を試みようと、刑吏に命じて少女の頸に大きな石を括りつけ、湖の中に沈めさせた。然れども火燄の中から救ひ出して下さつた天主様は、水の中でも少女を見棄てなさいませんで、前の天使が湖の底に顯はれて、無事にクリスチナを汀に引上げて下さいました。父は幾ら少女を苦めようと急つても、何時も〳〵骨折損に畢るのを見て、甚く失望し、到頭狂氣になつて死んで了ひました。

そこでヂオンと云ふものが代つて知事となりましたが、『父の死んだのは全く此娘の所爲である、ウヌ仇を伐たずに置くものか』、と馬鹿に力み返つて、様々の責苦を工夫して、少女を困らせようとしました。中にも一番恐ろしかつたのは、松脂を油に混ぜてクラ〳〵と沸らしたのを、幼兒を臥かせる搖籠の中に一杯注ぎ込んで、其中にクリスチナを臥かしたのでありました。然し天主様は未信者に辱を與へ、御自分の光榮を發揚すが爲に、彼等の面前で特更ら著しい奇蹟を行つて、少女を保護して下さいました。と云ふのは、少女が十字架の印をして搖籠の中に這中りますと、さしも沸り返つて居た油も、松脂も、忽ち其熱を失つて、快い湯の如くなつたので、クリスチナは群る人々を顧みて、『洗禮を授かつてから、搖籠に臥かされる様な心持がしますわ、

と諧謔ひました。

惡魔の手先たる彼の刑吏等は、僅か十歳位の少女に打勝ち得ないのを見て、齒を喰ひしばりて口惜しがり、婦女子に對する遠慮もあらばこそ、少女の頭髪を切り落し、衣服を引剥いで丸の裸體となし、アポロ神の寺院に引立て、惡魔に香を燒かさうとしましたが、不思議！少女が寺院に入るや、アポロの像は仆れて粉微塵となり、知事も其場にだうと仰反りかへつて即死しました。この奇蹟に驚いて、三千人と云ふ大勢が、忽ち迷の道を去りて、聖敎を信奉することになりました。

今度はユリアンと云ふ知事が代つて立ちましたが、『前知事の耻を雪ぎ、怨を晴らすのは自分の任務だ』、と頓でもない考を起して、少女を色々の責苦に遭はせた。先づ之を燃え立つ竈の中に投げ込んで燒き殺

さうとしたが、今度も天主樣の御力で、火は何の害をも與へませぬ。

クリスチナは五日の間も火の中に在りながら、頭の髪一本も燒けませんでした。今は迚も人力の及ぶ所ではない、惡魔の助力を藉るに若くなし、と云ふもので、魔法師に賴み込み、澤山の毒蛇を監獄内にウヨ〳〵と這入らして、少女を嚙み殺ささうとしました。然し折角の計畫も、少女の光榮を彌增に大ならしめるのみで、少の害でも加へることは出來ませぬ。餘りの憎らしさに、物が言へないやうにと少女の舌を切り棄てたが、前よりも一層爽に物語りもすれば、一層涼しい聲で天主樣の光榮を歌ふやうになりました。知事も今は百計盡きて、クリスチナを一本の杭に縛りつけ、之を標的に矢を射掛けさせたので、茲にクリスチナの玉より清き靈魂は、幾多の惡戰苦鬪を經て、目出たく

天國へ凱旋しました。

あゝ此聖女こそ、靈魂の偉大なる價値を悟つて居たのではありませんか。その財寶を打棄て、その快樂を抛ち、その生命までも犧牲にして、唯だ〳〵その靈魂を救はうとしました。我々も靈魂の眞價を辨へ天主樣が如何ばかり之を貴重にし給ふかを悟りましたならば、是迄の如く、幾ら靈魂が死滅の淵に沈み行かうとも、平氣で高所から見物して居られませうか。イエ〳〵、平氣で見物する所か、イエズス樣が靈魂の死滅を悲んで、御泣き遊ばした理由も自ら明になつて來て、非常に靈魂を大事に思ひ、之を滅さない爲には、有らん限りの力を盡すに至るでありませう。

然しイエズス樣は、何を彼樣にお悲みなさつたのでせう。我々が傲

慢故に靈魂を滅ぼすことになるのを、嘆き給うたのではありますまいか。我々を高く天の上までも引揚げんが爲に、自らは深く〳〵卑下り給うたその感ずべき御手本を仰視ながら、之に習つて身を卑下げようとはせずに、却て矢鱈に世の榮譽を望み、名聲を欲しがる我々の傲慢を悲んで、泣き給うたのではありますまいか。御自分は仇敵の爲にさへ死んで下さるのに、我々が人を憎み、遺恨を含み、復讐を企てたりするのを泣き給うたのではありますまいか。恥づべき邪淫の罪を幾個となく重ねて、靈魂を穢め、謂ば之を臭氣い、汚穢い泥濁の中に打沈めるのを見て、自分は世に罪惡の根絶をしたいばかりで、態々この涙の谷に天降り、十字架にまで磔けられて死んでやるのに、罪惡はいや增しに殖ゑるばかりで、一向減少はしないのを見て、泣き給うたので

はありますまいか。イエズス様は我々を皆んな救ひ上げたい、殘らず幸福ならしめたい、と望んで居なさる。隨つて、全能の御腕に造られ、見事な性質を賦與へられ、天國の終なき福樂までも享くべく約束されて居る此の美はしい靈魂が罪に汚されたり、惡魔の奴隷となつたり、地獄に突落されたりするのを見なさつては、何うしてもヂットして居られないので、斯くは悲んで泣き給うたのであります。

三、惡魔は靈魂を滅ぼさんが爲に、如何ほど働いて居るか。

聖アウグスチノは云ひました、『靈魂の眞價を知りたければ、往つて惡魔に御尋ねなさい、惡魔は靈魂を非常に貴く見積つて居るから、たとへ我々が四千年の間も生き存へ、絶えず彼に反抗うて來ても、終に到頭負けてその手に落ちることにでもなるならば、彼はその四千年間

の長い〳〵辛苦を物の數とも思ひますまい』と。人にも優りて惡魔の誘惑に難された舊約のヨブ聖人も、『人の一生は戰鬪なり』(ヨブ七ノ一)と嘆息しました。惡魔も亦た嘗て惡魔憑に口を滑らさして、『自分等は唯つた一の罪を犯したばかりで、天國を失ひ、何時になつても之を取返すことは出來ない。人間はその反對で、斯んなに數々の罪を重ねて居るから、矢張り天國に昇るの希望を失はずに居ること出來るのを見ては腹立たしくて堪らぬから、人間が一人でも現世に生きてる間は、誘惑を仕向けてやる』、と申しました。

實に我々は、何を爲るにも始終、惡魔の誘惑に惱まされて居るのです。傲慢を出し、虛榮心を動かし、人に善く思はれる、善く言はれると考へては、ホク〳〵と嬉しがることもあれば、人が妬ましくなり、憎

らしく思はれ、復讐を爲たくなつて來ることもあり、非常に汚らはしい想像が頭に浮み出て、逐へども〳〵逐ひ除け得ずに困ることもある。祈禱をしようと拜跪けば、直に心が八方に飛び廻る、天主樣の尊前に在ると云ふことさへ思付かなくなつて了ふ。アダムより今日まで如何な聖人でも、夫々に誘惑の嵐に襲はれない御方はない。今で大聖人と崇められて居なさるのは、一番恐ろしい誘惑に罹つて、見事之に打勝つた御方である。イエズス樣御自身が惡魔に誘はれ給うたのは、何人しもそんな目に遭ふべきものだ、と御諭し下さらんが爲でありましたから、我々は何時も其覺悟で居なければなりませぬ。然し何う云ふ理由で、惡魔は斯うまで連りに誘惑ふのでせうかと云ふに、それは申すまでもなく、靈魂の價値、その美點を識つて、何うにかして之を地獄

に引ぱり込みたいもの、もし其爲に自分は地獄の上に今一つ大な地獄が重つて來るやうな目に遭うても厭はない、と云ふ程の腰前になつて居るからであります。

斯う云ふ塩梅ですから、我々は何時も我身の上に注意して、不意を擊たれて敗北を取らないやう、充分に警戒して居なければなりませぬ。聖フランシスコは一日天主樣の御光を蒙りまして、惡魔が自分の弟子の修道者等を、色々の罪、取分け不潔の罪に誘ふ樣子を見ましたが、數限りない惡魔の群が、弓を滿月に引絞り、修道者等を目がけて、散々に箭を放つて居ました。然し箭によつては修道者の方へは飛び行かずに、却て之を放つた惡魔の許に勢鋭く逆戻する。それには流石の惡魔も驚愕して、きやつと一聲恐ろしく叫んで逃げ失せます。修道者

の方へ飛んで行つた箭にしても、その足下に落ちて、何の害をも加へぬのもあつたが、中には鏃の沒るゝほど深く突立つのもあれば、前から背へ串刺しに貫き通すのもありました。

斯んな塩梅だから、何人しも惡魔の征矢を立てられないやう、注意の上にも注意するが肝要である。その爲には聖アントニオの敎へ給うた武器を執りて戰ひませう。即ち傲慢の誘惑に遭へば、直に謙遜して、天主樣の尊前に身を賤める。不淨の罪に誘はれる時は、身体を責め、五官を愼み、前にも倍して我身の上を警戒する。祈禱を厭がる氣が發る時は、却て一層の注意と、熱心とを以て祈り、惡魔が之を中止めさせうとすれば、いよ〳〵長く、辛抱して祈る、と云ふやうに致しませう。猶ほ一番嶮呑で、最も警戒せねばならぬのは、自分では誘惑に罹つ

て居ると云ふことに全く氣が付かない時である。聖ゲレゴリオが未だ修院長であらせられた頃、部下に一人の修道者が居ました。隨分と熱心な方でありましたが、或時、惡魔に唆かされて、『修道院を出て世間に歸りたい、自分が茲に居るのは、天主樣の思召ではない』、と云ふ思が發つて仕方がありません。聖人が『それは惡魔の誘惑です、茲で易〳〵と靈魂の救濟が出來るのを見て、惡魔がそんな心を發さすのですから、夢々その手を喰ひなさるな』、と勸めましたけれども、その修道者は、『何うしても自分の考の通りだ』と思ひ込んで、心を變へませんから、聖人も已を得ず、暇を出してやりました。然し彼が出て行かうとする時、聖人は拜跪いて天主樣に向ひ『この憐れな修道者に、惡魔の謀計を悟らして下さいまし、と熱心に祈りました。聖人の祈むなしか

らず、件の修道者が今ま修道院を出ようと、門に足を踏みかけまする
と、忽ち大きな蛇が、スルリと上から落ちて來ました。びつくりして『救
けて下さい、大蛇が呑みに來た』と黄い聲で叫び出しました。何事だ
らうと皆なが驅付けて見ると、憐れな彼は顔色宛ら土の如く、死ん
だやうになつて打倒れて居るから、中に抱き込んで、介抱してやりま
した。そこで漸く迷の眼を醒して、『是れは全く惡魔の誘惑であつた、
院長さんが私の爲に祈つて下さつたから、望を遂げること出來ない意
趣返しに、斯うして私を魂切らかしたのであつたよ』と悟つたさうで
あります。誘惑を見分け得ないと、斯んな風に險呑ですから、何時も
天主樣の御光を願はなければなりませぬ。
兎に角、惡魔奴が絶えず機會を狙つて、我々を誘ひ、之を滅亡の穴

に突き落さう、と油斷なく働いて居るのは、靈魂の貴い價値を、充分
に辨へて居る爲に外ならぬのであります。是等のことを篤と考へて見
たならば、

何う云ふ結論に到者せねばなりませぬか。

我々の靈魂は實に貴い、天主樣は深く〳〵此靈魂を愛し、之を救ひ
上げるが爲に、言に餘る痛苦を堪へ忍び、後世には言ふにも言はれぬ
福樂までも備へて、竢つて居なさる。惡魔も此靈魂の眞價を看破つて、
之を滅ぼすが爲には、有りと有らゆる手蔓を求め、手管を盡しても猶
ほ足らずとして居る。それに我々は何の位この靈魂を大切に思つて居
ますか、何のくらゐ之が爲に心配して居ますか、靈魂は貴重なものだ、
靈魂の爲ならば幾ら骨折つても過分とは言はれない、と云ふことを一

度でも考へたことがありますか。

イエズス様はただ靈魂を幸福ならしめたいばかりで、あんな辛い目を見給うた。それに我々は却てこの靈魂を禍ならしめよう、苦ましめよう、と働いて居るかの様ではありませんか。少くも牛馬ほどの價値さへないものゝ様に、考へては居ませんか。牛馬には時々に喰はせ飲ませして居ませう。盗まれないやうに、馬屋の戸締を嚴重にして居ませう。少と病にでも罹つたと見れば、直に獸醫よ、藥よ、と騒ぎ出し、その痛ひ苦む狀を見ては、不愍の情に堪へないほどではありませんか。

所が靈魂の爲には何をして居ますか。度々祕蹟を拜授つて、之に聖寵の養料を供給つて居ますか。盗人に掻いさらはれないやう、嚴重に

戸締をして居ますか。耻かしながら何の食物も與へずに饑死さしては居ませんか。情慾と云ふ恐ろしい敵の牙に打委せて、思ひの儘に劈かせては居ませんか。戸も窓も開つ放しで、傲慢の惡魔が遣つて來れば、易々と之を這入らして、勝手に此の靈魂を傷けさせ、かき破らせて居る。不潔の惡魔が推進せて來ても、喜んで之を出迎へて、この憐れな靈魂を汚させ、腐敗かさして居るので、聖アウグスチノは嘆息して申されました、『如何にも可哀相な靈魂よ、傲慢人は一寸の傲りの爲に汝を賣り、貪慾人は少しばかりの御金の爲に汝を賣り、飲酒家はコップ一杯の酒に、復讐の念の強いものは、些少の遺恨にも汝を賣り飛して居るではないか』と。

實に我々はこの靈魂の爲に何をして居ますか、この靈魂の爲に何時

立派な祈禱をなし、熱心に聖體をを拜領し、ミサ聖祭に參與りましたか、苦しい中にも天主樣の思召を難有く推戴きましたか。仇敵をも愛したことがありますか。斯ういふ美はしい靈魂を、天主樣が御生命を拋つてまで、救ひ出して下さつた程に貴い靈魂を、我々ばかりは、何うして斯んなに疎略にして居るのでせう。徒に世間を愛し、世間の快樂にのみ憧憬れて、天主樣の光榮や、靈魂の救濟やと云ふことになると、直に欠伸をする、倦厭な氣を起す、苦情を陳べて居るぢやありませんか。何時迄も斯うして居つたら、一度は必ず切齒して口惜しがる時が來るに違ひありませぬ。あゝ、我々は何時迷ひの眼を覺すのでせう、世間の快樂は決して眞正の快樂ではないと云ふことは、

金口聖ヨハネの夢物語

を讀んで見ても一目瞭然で、靈魂をそち除けにして、只管世間の快樂を漁り廻つて居る人よりも、靈魂を大切にして、之を取失はないやうに始終注意して居る人の方が、來世では勿論、現世でからも幾れほど幸福であるかと云ふことが、手に取る如く明白に見ゐるのです。その物語と云ふは斯うである。

『私は何時ぞや、不思議な夢を見ましたが、覺めてからまでも、立派な默想の題になりました。と云ふのは、何處の何と云ふ所かは存じませぬが、夢の中に一の樂いさうな、何とも形容し難いほど景色の佳さうな谷間を見ました。其處には恍惚として人を醉はしめる程の總ゆる美しいもの、總ゆる財寶、快樂が流れて居るのですが、不思議にも、此の快樂の谷中に、一人の深い〳〵憂苦に沈んだりさうな人が茫然と

立つて居ました。その顔は何かを欲しがる樣、心はそは〳〵として如何にも落ち付かないもの丶樣で、擧動を見たばかりでも、その靈魂の平穩ならぬ、『亂れて麻の如し』、とでも言ひたい狀が窺はれる。石の如く突き立つて、身動きもせずに地上を眺め入るかと思へば、急にキョロ〳〵と邊を見廻はして、大跨に歩き出すが、亦た俄に立止つて、大きな嘆息を洩らし、如何にも落膽したりさうに、大層鬱ぎ込んで了ふ。私はいよ〳〵怪んで、篤と眼を注いで打見やると、此の樂しい谷の行き詰りは、恐ろしい懸崖、底知れぬ深淵になつて居つて、何物かが絶えず其方へ人を引ぱり込まうとして居る樣であります。それを見て此人は云ひ知れぬ快樂の中に侵つて居ながら、片時も氣を休め、心を樂ませること出來ぬのでありました』。

『然るに不圖眼を轉じて遙か向を眺めると、今のとは丸で正反對の一地がありました。陰氣らしい、眞暗な谷底で、削り立てたやうな山々、毛も生へぬ荒原が横はりて、青い葉、綠の莖一つ見えませぬ。唯だ恐ろしい荊棘の我物顔に蔓つて居るばかり。何處見ても、悲しい、物寂しい、身の毛も森立ちさうな所である。それに驚くべきは、此谷中に一人の瘠せこけた、屢れ果てた人が立つて居ましたが、然しその淸々しい顔色、のんびりと落付いた態度、滿足らしい樣子を一見しても、外貌の痛ましさに引換へて、心には言ひ知れぬ平和を樂んで居るらしく讀まれまする』。

『更に眸を放つと、此の恐ろしい谷底、荒れ果てた砂漠の端には、有りと有ゆる美しい、樂しいもの丶集りとも謂つべき樂天地が見付か

りました。今の男は、絶ねず此の樂しい境に眼を注ぎ、暫くでも其處を見失はないやうにして、はひわたる荊棘を踏み越ね〳〵足取勇ましく進むので、一歩〳〵身は荊棘にかき破られても、傷は一層の勇氣を增すのみでありました』。

『餘りの訝しさに、「何うして一人は此んな愉快の中に浸つて居ながら憂苦悲哀の底に沈み、一人はあれほど難儀な境にあつて、如何にも滿足らしく見ねるのでせう」、と我と我身に尋ねて居ますと、何處からか返答の聲が聞ねました。「汝の見て居るこの兩人は、專ら世間に愛着して居る人と、萬事を拋つて天主樣に仕へて居る人との姿を示したものである。世間は己に愛着するものに、財寶や快樂やを見せびらかして、之を誘ふので、彼等は萬事を忘れて、その中に身を投げ入れるが、さて實際之を攫んで見れば、その財寶と思はれ、快樂と見ねたのは、全くの幻影で、何一つ手に遺る所はないと分つて、非常に落膽するのである。取分け悲しくて〳〵、堪へ難く覺ねられるのは、その行詰りには、恐ろしい地獄の穴が横つて居るので、此の平かな、樂しさうな道をひた走りに走つて居ると、早かれ晩かれ、一度はその穴に落ち込まねばならぬことである。他の一方は之れとは丁度正反對で、天主樣に仕へるには、始の程こそ隨分と苦しい、辛い思がする。涙の谷にでも住んで居るやうなものだ。我身を責めねばならぬ。己に無理をし、現世の愉快を斷ち、窮窟な、不自由な中に其一生を送らねばならぬ。然れども一方からは後世の窮りなき福樂を思ひ、その希望の光に强められる。實に此の涙の谷に住む人の運命は、悲しいは悲しいに相違な

いが、然し未來の福樂の大きなことを思ふと、慰藉も得らるれば、勇氣も附けられる。何事が起つて來ても、心の平和を攪亂される憂はない。天國の歡樂は確に約束されてある。早や門を出て喜び迎へて居る。やがて夫れが手に入るのだと考へては、言ひ知れぬ快樂を感ぜざるを得ないのである」と聞いて私もいかさま然うかと合點が行きました』。

一生の間、唯だ天主樣の御旨に適ひたい、己が靈魂を救けたい、と努める人と、天主樣も靈魂も放からかして、只管世間の快樂を追つて廻つて居る人とは、如何ほどの相違があるかと云ふことが、面前に見せつけられるやうに描かれてあるぢやありませんか。『人の自ら見て正しとする途にして、その終は遂に死に至る途となるものあり。笑ふ時にも心に悲あり、歡喜の終を憂苦ぞ占領する』（箴言一四ノ一三）と、サロモンの箴言にありますが、實に世間の快樂に憧憬れて居る人は、現世でも滿足な快樂を味ふことは出來ませんで、末は必ず地獄の底知れぬ淵に落ち込まねばなりませんが、その反對に、重い十字架を擔いで善德の途を進む人は、今でこそ多少の困難もありませうが、それは決して長い間のことでもありませぬで、果ては必ず天主樣を我物として、千代に八千代に樂むべき天國に行き達くのであります。是れを之れ思ひましたならば、惡魔が有らん限りの力を盡して、靈魂を滅ぼさう滅ぼさうに掛つて居る理由も、イエズス樣が熱い涙をハラ〳〵と零して、御泣き遊ばした次第も明白になつて、非常に靈魂を大切に思ひ、萬事を拋つても、靈魂だけは是非とも救けねばならぬ、と云ふ氣にならずには居られないでありませう。

大正二年六月廿五日印刷
同　廿九日發行　（定價拾貳錢）
同　四年七月五日再版
同　十二日発行

譯者兼發行者　長崎市南山手町乙二十八番地　浦川和三郎

印刷人　長崎市本博多町一番地　富永官十郎

印刷所　長崎市本博多町一番地　重誠舍

發行所　長崎市南山手町乙一番地　天主堂

278
227

終